

風を起こす <第16回>

無名の「福島」を
世界に選ばれる「福島」に

福島県農林水産部農産物流通課副課長

市村 尊広さん

週刊誌『AERA』2011年1月3・10日合併増大号の特集記事。中国に勝った日本人100人のタイトルで、中国で活躍する日本人がリストアップされている。この中に自治体職員として唯一、名前を挙げられているのが福島県職員・市村尊広さん。記事は次のように紹介している——「中国のアルファブローガーを利用するなどお金を使わずに効率的なPRで福島県の知名度アップに貢献。検索サイト、百度でのヒット数が2万件から280万件に大幅アップ」。

今後さらに大きな効果が期待されていた戦略は、記事掲載からわずか2カ月後、もろくも崩れ去った。

東京だけでは先が知れている

「上海に赴任しないか？」市村さんに声がかかったのは2002年、日本貿易振興機構（ジェトロ）に出向中のことだった。「上海ですか」。正直、気乗りする話ではなかった。中国語なんてしゃべれないし、そもそも中国に興味がない。

福島県の商工労働部で製造業の金融支援や商業振興を担当してきた市村さんは、自分の仕事にやりがいを感じていた。異動して4年目。シャッター通りと化した商店街を再び活性化すべく、全国に先駆けまちづくり条例の制定に向け動き出したばかり。やりたいことは山ほどあった。その中での出向。「さらに海外赴任だっ



[いちむら たかひろ]

1967年、福島県双葉町出身。1990年、福島県入庁。教育庁、土木部を経て1999年より商工労働部で中小企業の支援を担当。2002年より日本貿易振興機構に出向、うち2年間は上海センターに勤務。2005年、福島県庁に戻った後、2008年より再び上海へ。福島県上海事務所の二代目所長として辣腕を奮った。2011年4月より現職。



福島県上海事務所でスタッフとともに

商工労働部にいた頃、融資のため町工場を訪れると経営者が油まみれの作業着姿で迎えてくれた。ふちの欠けた茶碗でお茶を飲みながら、苦しい経営状況に耳を傾けた。「なあ、市村さんよ。入ってきたお金をどの順番で払うかわかるかい？ まずは従業員の給料。それから原料の仕入先、公共料金と払って、残りが私の給料。時にはゼロってこともあるんだよ」厳しい台所事情はどれも同じだった。

「中小企業のお役に立てることは何かと考えたとき、新興国への輸出や海外からの観光客誘致は欠かせないなど。日本が人口減少時代を迎える中で、東京だけを見ていては先細りする。地域経済発展の

ために中国を知ること必要かもしれない。そう思い直して、上海赴任に踏み切りました」

日本人の常識を超えた世界

翌年4月、妻子とともに上海へ飛んだ市村さんは、赴任2日目にして手痛い洗礼を受けた。家族で近所の公園を散歩しているとき、ウーロン茶を法外な高値で買わされたのだ。

「娘がのどが渴いたと言うので、ウーロン茶を指さし、手のひらのコインから料金分だけ取ってくれと示すと、売り子は20元を取っていきました。実は定価1元だったと知って、やられた！」と

多少の上乗せはわかるとしても20倍は日本の常識ではあり得ない。それも買手は3歳の子どものものだ。一事が万事。仕事でふっかけられたのも一度や二度ではない。

「知れば知るほど彼らのたくましさに驚かされたというか、日本人の想像を絶する世界でしたね」

失敗を繰り返して、痛い目に遭ったことで、中国への関心は一気に高まった。

「簡単には財布をあげない彼らにお金を使ってもらうには、どうしたらいいか？ 中国の経済成長の恩恵を、どうすれば引っ張ってこれるか？ 一筋縄ではいかない相手なだけに、もし、それが実現でき

ばすごいことですよね。それを本気になつてやろうと思ったのです」

情報化社会といえども、生の声に勝るものはない。市村さんは月曜から日曜までほぼ毎日、日系企業で働く日本人や取引先の中国人を誘っては夕食を共にした。「現地従業員の給料が高くなつて困った」「食堂のご飯がまずいと言ってデモが起きた」：来る日も来る日も、むさぼるように現地の話を聞く中で、本やテレビでは伝わってこない情報を手に入れ、中国への理解を深めていった。

大河の一滴では意味がない

出向先のジェットロで2年間の上海赴任を終え、県庁商工労働部に戻った後、再び市村さんが上海に赴任したのは2008年4月。福島県上海事務所の二代目所長というポジションだった。

既に中国事情に精通し、ビジネスをする上での下地が出来上がっていた市村さんは着任早々、行動を開始した。

福島県上海事務所の果たすべき使命は大きく三つ。一つ目は「県内への観光客の誘致」、二つ目は「県産品の輸出促進と販路開拓」、三つ目は「製造業の取引支援」。いずれも、最終的に地域経済の発展につながるものだ。

「はじめの二つについて、重要なカギを握るのは知名度です。したがって、知名

度を上げるためのPR活動…となるのですが、上海は人口2000万の都市。東京より700万人も多いんですよ。何十万円も使って雑誌に広告を載せても、大河の一滴のようなもの。そんなPR活動は経費のムダでしかありません。いかにお金を使わずに効果的なPRができるか、真剣に考えました」

——それで、何をしたのですか？

「私たちは、インフルエンサーと呼んでいたのですが、要は人気ブロガーを活用したのです。インターネット上で絶大な影響力をもつ人気ブロガーを、北京と上海から計3人福島県に招待。観光スポットやグルメを満喫してもらって、ブログに写真や文章を載せてもらいました」

今でこそよく知られる手法だが、当時はまだ珍しかった。しかも、広告代理店やコンサルタントを使わず、すべて自前。これぞという人気ブロガーを探し出し、説得し、福島の旅に満足してもらわなければならぬ。交通費と宿泊費で1人15万円かかったが、県内企業の協賛を得て、県が負担したのは10万円程度。インフルエンサーのお陰でホームページのヒット件数が1000万を突破したことを考えれば、費用対効果は十分すぎるほどである。

「思えば」が将来につながる

もう一つ、市村さんが大きな成果を上

げたのが、富裕層の修学旅行生の誘致。日本では原則、全員参加の修学旅行だが、中国では参加者を募ってから企画する。3〜4カ所に分散される行き先は、オーストラリアやシンガポールなど複数の候補地の中から、保護者も一緒になって決めていく。

「まずは世界の中から日本を選んでもらい、次に日本の中から福島県を選んでもらうという、二段階での選抜に勝たなければいけないのです」

市村さんの営業活動は昼間の学校訪問にとどまらない。夜7時から始まる保護者の集まりで、パワーポイントを使い日本の魅力、子どもたちが福島を訪れるメリットをプレゼンする。「福島県出身のノーベル賞学者・野口英世は、幼い頃、手に大やけどを負って、学問の力で身を立てられるよう母・シカは…」ストーリー仕立てで、教育熱心な親たちに訴えかける。

小皇帝・小皇后として育った子どもたちの協調性を養うキャンプ体験、新鮮で安全な福島県産の食材を使ったバーベキュー体験、日本の同世代の子どもたちとふれ合える学校交流。さまざまなプランで子どもたちの関心を引き、親心をくすぐる。候補地に選んでもらうべく足を運んだ学校は170校以上。

「修学旅行生に来てもらうということでは、思い出をつくらうということですね。大人の場合、海外旅行では行ったこ

とがない国を選びがちです。それに対し、子どもは修学旅行で行った場所をしっかり記憶しています。いい思い出があれば、また行ってみたいと、新婚旅行や家族旅行で来ることもあるでしょう。年をとってから、青春時代を懐かしがって再訪してくれるかもしれません。

将来に向けて、福島県を世界に選ばせる観光地とするためには、その礎となる活動が必要だと考え、富裕層の修学旅行生誘致に力を入れたのです」

実際に訪れた修学旅行生に「印象に残っていることは？」と問うと、思いがけない答えが返ってきた。「旅館の人たちが最後まで手を振って見送ってくれた」「食事のサービスがすごく丁寧で、親切だった」「日本の学校で友だちができた」。楽しいレジャー施設や買い物よりも、人とのふれ合いやホスピタリティこそ、子どもたちの心に深く刻み込まれているのだ。

旅館や学校など関係者の協力もあって、1年目は2校80人、2年目は4校300人、3年目は5校400人と福島県を訪れる修学旅行生は右肩上がりが増え続けていた。それは即ち、観光客の増加につながり、ひいては地域経済の活性化に結びつくはずだった。市村さんがまいた種は確実に芽を出し、近い将来、大きな花を咲かせるはずだった。

そこに起こった東日本大震災と原子力発電所の事故――。



「ごちそうふくしま満喫フェア2011」では地元小学生の吹奏楽演奏に続きオープニングセレモニーが行われた

3月11日、上海事務所で知った大震災

その日、市村さんが震災の第一報を聞いたのは、外出先から戻った後だった。「日本が大変なことになっていますよ！」所員にうながされテレビを見ると、津波が沿岸のまちを飲み込んでいく様子がライブ映像で流されていた。

急いで日本に連絡を取るが、電話もメールも一切つながらない。「一人暮らしの母は、ちゃんと避難できただろうか」「県

庁の同僚たちは無事だろうか」。何一つ確認できないまま事務所に泊まり込み、ようやくつながった東京経由で福島状況を確認できたのは、震災発生から2日後のことだった。

「上海の福島県人会には約200名の会員がいますが、みんな不安で居ても立ってもいられませんでした」

特に原子力発電所の事故以降、涙ながらに日本の家族や知人のことを心配する会員たちの姿に、市村さんは胸が締め付けられる思いがした。テレビやネットで情報をかき集め、少しでも不安を減らせるよう奔走した。

事故の行方を世界中が見守る中、中国国内のインターネット上では「日本は沈没する」など過激な言葉も飛び交い始めた。間違った情報をこれ以上広めてはいけない。上海事務所では中国版ツイッター「微博」を使って、福島の現状を直接発信し始めた。

「微博」は福島の知名度アップや観光PRを目的に、3週間前、開設したばかりだった。それが、まさかこんなことに利用されようとは……。開設当初1000人程度だった登録者数は、震災を機に3万人を突破した。

帰国後、農産物流通を担当して

原発事故がまだまだ予断を許さない3

月末、市村さんは慌ただしく帰国し、農林水産部農産物流通課に配属された。担当は農業（1次産業）×工業（2次産業）×商業（3次産業）を連携させた6次産業化で「福島県の新しい基幹産業をつくるっていくこと」が使命。震災前に内示を受けた部署で、これまで築き上げたネットワークはすぐにも生かされるはずだった。だが、着任して3カ月間、風評被害対策に翻弄された。県産品が次々に出荷停止に追い込まれている中で、6次産業化どころではなかった。

「8月からや々と本来の仕事に戻ることではできませんが、すべての国で福島県産は全面輸入禁止。この分だと、海外に打って出る時期は当分先にならざるを得ないでしょうね」

市村さんが深いため息を漏らすのも無理はない。無名だった「福島」の知名度を上げるのに、どれほど知恵をしぼり、どれほど汗をかいたか。それが原発事故のせいで一瞬にして世界中に知れ渡った。「福島Ⅱ原発事故」という不名誉な形で。何と皮肉なことだろう。もはや神のイタズラとしか言いようがない。

「報道関係者から県の風評被害対策について質問を受けますが、私たちからすれば報道の仕方にも問題があります。正しくは東京電力福島第一原子力発電所とすべきが、安易に福島原発と省略されることで風評被害は助長されているのです」



会津そば、相馬ジュシーメンチカツ、郡山グリーンカレーなどご当地グルメのテントの前には長い行列ができていた

全国3位の面積をもつ福島県は東西に長く、原子力発電所のある太平洋側から奥羽山脈の麓・会津地方までは200km以上の距離がある。にもかかわらず、「福島」とついただけで消費者に敬遠される。県ではモニタリング検査を徹底し、安全なものしか流通させていないようにしている。放射性物質が全く検出されていないものでも、福島産は店頭にすら並べてもらえない。八方ふさがりの状態で、一体どうすればいいというのか。

「消費者の気持ちもよくわかるんですよ。私にもまだ小学生の子どもがいますから。あとは、私たちが流通させているものは食べても大丈夫」ということを地

道にお知らせしながら、皆さんが大丈夫と思ってくれるまで我慢するしかないでしょう」

「福島産」が行き場を失う中、消費者に安全性を訴え、直接販売するイベントは数え切れないほど開催してきた。

「風評被害対策、モニタリング検査、除染。マイナスをゼロに戻す作業に追われ、職員たちは肉体的にも精神的にも疲弊しきつています。そんな状態で仕事にやりがいを感じ、モチベーションを維持するのは正直、大変なことなんです。

自治体がすべきは住民に夢や希望をもってもらうための仕事。ですが、今は職員自身が夢も希望も語れなくなっています。そこが回復するまでには、もう少し時間がかかるでしょうね。とりあえず、今は目先のことに対処していくしかありません」

嘆きともあきらめともつかない表情に、福島県がおかれている厳しい現実がにじみ出ているようだった。

共に支え合い、励まし合いながら

話をうかがった翌日、市内中心部で「ごちそうふくしま満喫フェア2011」が開催された。そこには担当者としてかいがいしく動き回る市村さんの姿があった。昨年度に続き2回目を迎えるこのイベントは、福島産の魅力を全国へ向けて発信

する食の祭典、のはずだった。

だが、震災や原発事故の影響で今年度の開催可否はぎりぎりまで検討された。最終的に開催を決めた理由は「県産品の安全性と魅力を、まずは県民に理解してもらいたいから」。活気あるイベントで県民を元気づけようと、初の屋外開催に前年度を超える130のブースが軒を連ねた。

天候に恵まれた初日の客足は上々。浪江やきそば、白河ラーメン、会津ソースかつ井：人気のB級グルメの前には長い行列ができた。ビール片手に川俣シヤモをほおばる若者たち、大皿の福島餃子をつつく親子連れ、作り手と言葉を交わし味噌を購入する年配のご夫婦。さわやかな秋晴れの下、日頃の不安ややり場のない怒りを吹き飛ばすかのように、にぎやかな声が響き、笑顔があふれた。

「盛況ですね」市村さんに声をかけると、「まだまだですよ」と言いながら、小さく顔がほころんだ。

「県内外から人がたくさん集まって、伝説として語り継がれるくらいビッグなイベントになればいいですね」

一住民として憤りややりきれなさを感じつつ、自治体職員として最前線に立つ。時にくじけそうなる自らを奮い立たせながら、再び、住民が夢や希望を取り戻す日まで、市村さんの闘いは続く。

(協会職員／篠田良子)